

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

北海道から九州まで新幹線で一つにつながった記念すべき二〇三〇年の日本。阿形県賀条郡晴太多という鉄道の駅もないドを五個つけても足りないくらいの下田舎出身の「僕」こと野宮淳一は、東京の大学に進学し、そこで知り合って仲良くなった増田、岡部さん、三浦さんを連れて、UFOが出現すると話題になっていく晴太多にゴールデンウィークを利用して帰ることとなった。人口も少なく、その場所すらほとんどの人が認識できない晴太多ではあったが、「スリー・フィンガー」というベンチャー企業の参入により、顔認識と音声認識で買い物などの役目を受けるパーソナルアシスタントの「タダちゃん」や、買い物したものをすぐに配達するオートモビル、オートドローンが町民専用で完全実用化していることで知られてもいた。

UFOとかそういうものがとにかく大好きな増田がぜひ一緒に連れて行ってくれないかって言い出して、父さんや母さんに確認したらぜひ連れていらつしやいと。泊まる部屋はいくらでもあるんだから、何なら他の友達も一緒に。岡部さんも三浦さんも実家に帰る予定はなかったのだから、じゃあ、つてことになった。もちろん我が家の受け入れ態勢はオッケイ。田舎の農家だから家は大きくて部屋はたくさんある。

それに、実は「晴太多」の住民にはとある約束事があるんだ。

①「若い人にはどんどん町に来てもらえ」

僕が小さいころにはほとんど限界集落に近いところまで人口が減った「晴太多」は、役場の人たちの努力で東京のベンチャー企業「スリー・フィンガー」

を誘致してサテライトスタジオを作ったことで劇的に変わっていったんだ。

僕がまだ小学校に上がる前のことだったからよく覚えてないけど、友星叔父さんも「スリー・フィンガー」のプログラマーとして東京から「晴太多」にやってきて、なんだかんだがあつて、僕の父さんの妹の綾那叔母さんと結婚してそのまま住民になっている。

それから、町の名物である、風光明媚な谷を繋いだ体験型観光施設ジップラインを作って観光の目玉にしたり、野菜の「工場」を造ったり、農家の数を増やしたり、とにかく若い移住者を募って人口を増やして「晴太多」の未来を明るくするために、叔父さんも叔母さんも含めて、町民一丸となって努力したらいい。

UFOの目撃情報の多い時間帯である夜十一時に「僕」と増田と岡部さん、三浦さんは夜の散歩に出た。しばらく夜の景色と空気を楽しんでいたら、山の上に楕円形で、白い光を放っていて、下部からは赤や青の光も見える飛行物体を目撃した。急いでその山に登ろうとした四人は、山道に入るところの山小屋風の事務所で、友星叔父さんと「スリー・フィンガー」の橋本さんがバルーンドローンを操作しているのに遭遇した。飛行物体の正体は、UFOに見えるように作った観測機であるとする。それによって生物環境調査と地質調査を行っているのだという友星叔父さんから、四人は家に帰って詳しい話を聞くこととなった。

生態系を調べるのも地質を調べているのもわかった。けっこうスゴイ最先端のことをまた「スリー・フィンガー」がやっているのも理解した。

でも、その調査をして何をするのかが、まだわからない。そう言ったら、叔父さんは頷いた。

「ここを、〈晴太多〉を〔終の住み処〕にしてもらうためさ」

「〔終の住み処〕?」

「そうだ、って大きく領いた。」

「お前も知ってる通り、ここ十何年間、役場のあゆみさんを先頭に僕ら(スリー・フィンガー)もそして新しく作った観光課も一生懸命やってきたんだ。(晴太多)に企業を誘致したり、農業を盛んにさせたり、観光の目玉を作ったりな」

「(タダちゃん)やオートモビルもそうだよな?」

「そうだ。お陰で十何年前とは比べ物にならないぐらいに人口は増えだし、活気がある町になった。でも、それには限界がある。どんなに頑張ってもここにデイズニールランドはやってこないし、百万都市にもなりつこない。そうだよな?」

訊かれて、皆で領いてしまった。確かにそれはそうだ。

「町には、ちょうどいいサイズつてもがある。自然環境を壊してまで町を大きくする必要は感じない。そこで、この先二十年三十年掛けて完成させる新しいプロジェクトを立ち上げているんだ。これはその一環」

新しいプロジェクト。

「〔終の住み処〕を作るといふプロジェクトになるんですか?」

岡部さんが訊いたら、叔父さんは領いた。

「それはどういう」

「どんな災害が起きてても、ここにいれば大丈夫という環境を作り出すんだ。それで、今現在の町民にいつまでもここにいてもいい、同時に新しい住民もゆるやかに誘致していく」

災害。

「そうか、じゃあ④を調べ直しているのも」

増田が言ったら、叔父さんは領いて続けた。

「日本は世界でも有数の災害多発国だ。地震というものからは逃れられない。だったら、被害を最小限にとどめて、水や食料や避難所の確保、倒壊や山崩れや土砂災害に見舞われない住居を造ればいい。幸い(晴太多)には海がないので津波の心配はない。山のお陰で大きな台風も来ない。あるのは土砂災害や地震だ。その被害を極力取り除いて、見舞われたとしても絶対に誰も(避難民)とならない町。ひいては、周辺の町が災害に見舞われたときには、被災者をしつかりと受け入れられる町造り。(晴太多)をそういう町にしよう、ここを〔終の住み処〕にしてもらおうっていうプロジェクトだ」

「スゴイです」

三浦さんが⑤。

「当然それは、発電とかのライフラインを含めての話ですよ?」

「もちろんだ」

叔父さんが大きく領いた。

「今まで起こった災害を見れば、ここみたいな田舎は道路が寸断されて救援物資が届かないとか、ライフラインがずたずたになってしまうような悲惨な目に遭ってしまうのが常だったよな。でも、逆に、災害で周りから切り離されても、ここだけでもずっと生き残れる町造り。どんな災害が起きてても、ここに住んでいけば大丈夫というものを作り出す。コードネームは(プロジェクトP)」

「Pって?」

「パラダイスのPだ」

パラダイスカ。

それは、確かにスゴイ。ゼツタイに災害に負けない町が本当に完成したら、

そこに住みたいって思う人はたくさんいるはず。

そんなことを始めたんだ。(晴太多)は。

でもさ。

「ひよっとして、UFOみたいな騒ぎにしたのはさ」

「趣味だよ」

やっぱりか。

「そうだと思う」

「そういう会社なの?」

三浦さんが言った。

「だって、(スリー・フィンガー)の庭には、知らないかもしれないけどウルトラセブンが飾ってあるんだからね」

父さんたちが小さい頃のテレビ番組だ。ウルトラセブンは地球を救う宇宙人。叔父さんが、笑った。

「皆は知らないだろうけど(スリー・フィンガー)の社風みたいなもんだね。どうせやるならおもしろいことをって感じさ。そしてもちろん、宣伝も兼ねてる。この(晴太多)のね」

「UFO騒ぎで注目を集めてから、どどんと発表するってことですか!」

増田が訊いた。

「その通り。お陰様でこのところネットに上がるキーワードで(晴太多)は相当上位になってるよ。君みたいな物好きもたくさん押し掛けてきてるしね。ただまあもうゴールデンウィークで家族連れも増えるから、ここで発表しようって最初から決めていたんだ」

友星叔父さんは、ニコツと笑って皆を見回した。

「もし君たちが大学を卒業して、それぞれの分野でこのプロジェクトに参加し

たいときにはよろしく頼むよ。まだまだ先の長い話だ。ひよっとしたら、君たちが僕ぐらいの年齢になる頃によく完成するような話だからな」

うん、そうだね。

そして、けっこう楽しそうな話になるのかもしれない。

※1 限界集落……過疎化・高齢化により、経済的・社会的な共同生活の維持・存続が危ぶまれている地域のこと。

2 サテライトスタジオ……本拠地以外に設置した活動を行う小規模の拠点。

3 ライフライン……生活に必要な水道・電気・ガスなどの供給システム。

問一 ——線①「若い人にはどんどん町に来てもらえ」とは、(晴太多)の

どのような目的にとつての約束事か、本文中から十字で書きぬきなさい。

問二 ——線②「(終の住み処)にしてもらう」の意味とほぼ同じ表現を本

文中から十六字で探し、書きぬきなさい。

問三

——部③の友星叔父さんの発言にはどのような考えがあるのか、本文中の言葉を使って次の文の□に合うように四十字以内で

答えなさい。

□ という考え。

□ という考え。

□ という考え。

□ という考え。

□ という考え。

□ という考え。

問四 ④ に入る語を本文中より探し、書きぬきなさい。

- ア 眼を輝かせた イ 口をとがらせた
ウ 肝に銘じた エ 鼻を鳴らした

問五 ⑤ に入る言葉を次から選び、記号で答えなさい。

部⑥「ヘスリー・フィンガー」の社風」とは、どういうことを意味しているのか。正しくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア UFO出現で話題を作り盛り上げるような遊び心のある会社。
イ 地球を救うヒーローになりたいといった夢を持っている会社。
ウ インターネットでの検索数を競って誇りとするような会社。
エ 真面目な目的を持ちながら楽しいことも大事にしようとする会社。

問七 部⑦「君みたいなの好き」の意味するところを次の

合うように本文中から二十字で探し、書きぬきなさい。

人たち。

二

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

枯れて落ちた葉は地上にたまって腐って土にかえります。太陽の光と地上からの養分、水分でつくりあげた木の葉です。なかにはたつぷり植物が生長するために必要な要素が蓄えられています。

日本一大きなブナの木がはじめて見つかったところ、見に行つたことがあります。まだほとんど人間が踏み込んでいない森でしたから、その木の下は長い間にたまった腐葉土でスポンジの上を歩くようにふかふかでした。持っていた杖を木のまわりの地面に差し込むと、一メートルほど難なく入っていました。それほど木の葉は積もって、空気や栄養分や水分を蓄えているのです。

② 今の日本の農業はたくさんさんの農薬、化学肥料を使います。

科学は畑で野菜が育つために必要なものは何か、田んぼで稲が育ち、十分な収穫を上げるためには何が必要かを研究、分析しました。

③ その結果、最低限必要なものを採り出し、それをあたえればいいと考え、合成した肥料を製造会社が市販しています。それさえあれば、野菜や稲は育つと考えているのです。実際に、それらの肥料をまいた畑や田んぼではたくさんさんの野菜や米が穫れました。

たくさん捕れたイワシから脂を搾った残りを干したものを「干鰯」といいますが、化学肥料が出る前は、そういうものや岸に打ち上げられた海藻を拾って畑に運んでいました。それらを肥料として使っていたのです。

農家の人がお金を出して買う肥料を「金肥」といいます。

化学肥料を多量に使うようになったのは昭和三十年以降のことです。効果はてきめんで、収穫量はぐっと上がりました。そのうえ手間のかかる堆肥づくりをしなくてすむようになったので、大量に使われるようになりました。

問八 部⑧「そして、けっこう楽しそうな話になるのかもしれない」とあるが、もしあなたが大人になって「ヘスリー・フィンガー」の社員になったとしたら、どのようなプロジェクトを立ち上げたり開発をしたりして「晴太多」の未来の町づくりをしたいと思いませんか。次の条件に従って答えなさい。

- A 「プロジェクトP」にこだわらなくてもよいが、「ヘスリー・フィンガー」が真剣に「晴太多」の未来のためにすべきことについてその社風を生かして行ったらどんなアイデアを思いつくだろうかと考えて書くこと。
B そのプロジェクトや開発を行う目的（あるいは理由）と、具体的な内容を書き、「ヘスリー・フィンガー」の社長に自分の企画を紹介する提案の形式で書くこと。
C 八十文字以上、百二十文字以内で書くこと。ただし、出だしの一マスは空けないで書くこと。

それまでは田んぼにレンゲを植えたり、山から落ち葉を集めてきて牛糞や鶏糞を混ぜて発酵させて田んぼや畑にまいてきました。

④ 堆肥とはこうした自然の材料でつくった肥料のことをいいます。有機物に満ちた肥料です。

化学肥料の多くには有機物が入っていません。窒素、リン酸、カリという、植物に必要な化学物質を工場で作くりだしているのです。それらの元になっているのは、植物や動物質ではありません。

農業に適した土というのは、土が三分の一、水分が三分の一、空気が三分の一のふわふわした軟らかな土だそうです。

ところが有機物が入らない肥料を使っていたのでは、そうした割合にならないので土ががれきようになってしまいます。硬いコンクリートのようなのです。がれきのような土を元に戻すには、十アールあたり二トンぐらいの有機質の肥料を十年間入れ続けなくてはならないといわれています。

化学肥料だけを長い間使ってきた畑や田んぼは、有機質が足りなくなって不健康な状態になっています。不健康な土からでもたくさんさんの収穫を得るために、なおさらたくさんさんの化学肥料を使っているのが現状です。

近ごろ、こうした畑や田んぼから穫れたものよりも、有機質の健康な土で育つた野菜や米や果物のよさに気がつく人が増えてきました。そして、そういう有機肥料を使った農業が復活してきています。

スーパーマーケットや八百屋さんに行きますと、「有機野菜」「有機米」などの表示のある品物が並んでいるのを見かけるでしょう。

では、有機質の肥料をつくるにはどうするかといいますと、昔ながらの方法が見直されているのです。

秋に枯葉が落ちたら山に落ち葉を集めに行きます。山といっても遠くの高い

山ではなく、人が暮らす村の近くの里山です。昔は農村を取り巻くように、そうした山や雑木林がありました。集めてくるのは里山にいっぱいあったドンダリのなるコナラやミズナラ、クヌギなどの雑木の葉です。肥料にはそうした葉が一番いいのです。

持ち帰った葉っぱに完熟鶏糞(鶏の糞を発酵させて完熟させたもの、六年ぐらい発酵させる)を混ぜ込んで、一年ほど外に置いておきます。これにさらに枯葉や鶏糞を足して切り返し(何度もひっくり返して混ぜ合わせる)、二年目からは肥料置ききの建物に入れて鶏糞や糠を混ぜて、さらに発酵させると、七〇度ぐらいまで温度が上がってきて、堆肥は土のように粉々になってきます。バクテリアの分解、発酵する力を利用して枯葉を有機質に満ちた土にかえしているのです。

二年目には、枯葉は拾ってきたときの量の二〇パーセントぐらいまで減っていきます。こうして三年間熟成させて田んぼへ入れます。この作業を毎年繰り返してやっていると、すばらしい田んぼや畑ができあがります。有機農業の堆肥はこのように山の葉を使ってつくっていたのです。

こうした農業をする人たちは、

「山が肥えれば田が痩せる、山が痩せれば田が肥える」

といいます。山の枯葉をみんな拾ってきてしまえば、山の土は養分が少なくなって、だんだん痩せていくけれども、田んぼには有機肥料を入れてもらって肥えていくということをいった言葉です。現在は枯葉を集める人がいないので「山が A、田が B」状態が続いています。山の本と田んぼはこうしてつながっていたのです。自然は大きな動きのなかで強く関連していたのです。目の前の収穫、お金で解決する便利さのために、こうした大きな循環を私たちは忘れていたのです。コンクリートのように硬くなった土を見

てそれを反省し、あらためて木のこと、山のことを考え直そうとする動きが起こっています。

(塩野米松『木の教え』)

問一 — 線①「その木の下は長い間にたまった腐葉土でスポンジの上を歩くようにふかふかでした」について、ここでは「腐葉土」が「スポンジ」にたとえられている。このような土とは反対の性質の土は本文中で何にたとえられているか。本文中から二つ書きぬきなさい。

問二 — 線②「今の日本の農業はたくさんさんの農業、化学肥料を使います」とあるが、なぜたくさんさんの農業、化学肥料を使うのか。その理由を三十字以上四十字以内で答えなさい。

問三 — 線③「最低限必要なもの」とは何か。具体的に述べている部分を本文中から九字で書きぬきなさい。

問四 — 線④「堆肥とはこうした自然の材料でつくった肥料のことをいいます」とあるが、日本の農業ではいつごろまでこうした「堆肥」を主に用いて作物を育てていたか。「〜ころまで」という文末に合うように、本文中から書きぬきなさい。

問五 A B に入る語の組み合わせとして適切なものを次から

一つ選び、記号で答えなさい。

- ア A 肥え B 痩せ イ A 肥え B 肥え
ウ A 痩せ B 肥え エ A 痩せ B 痩せ

問六 次の文が入るべき場所を探し、その直前の八字を答えなさい。

それは山の木の落ち葉を利用する方法です。

問七 本文の内容として適切でないものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 化学肥料を使用することで、作物を育てるのに十分な栄養分を簡単に土に補うことができる。

イ 一度化学肥料に頼ってしまった土地を健康な状態に戻すには多大な時間と手間が必要である。

ウ 近年、手間のかかる有機農法が見直されているのは、有機農法でつくられる野菜が健康に良いからである。

エ 昔は人々の生活の場が山や林に近く、肥料にするのに適した落ち葉を集めることが今よりも多かった。

次の詩は、茨木のり子さんの「もっと強く」の一部分です。これを読んで、後の問いに答えなさい。

① もっと強く願っていいのだ
わたしたちは明石の鯛が
たべたいと

もっと強く願っていいのだ
わたしたちは幾種類ものジャムが
いつも食卓にあるようにと
もっと強く願っていいのだ
わたしたちは朝日の射す明るい台所が
ほしいと

② すりきれた靴はあっさり捨て
キユツと鳴る新しい靴の感触を
もっとしばしば味わいたいと

秋 旅に出た人があれば
ウィンクで送ってやればいいのだ

③ なぜだろう

④ 萎縮することが生活なのだ

⑤ おもいこんでしまった村と町

家々のひさは上目づかいのまぶた

おーい 小さな時計屋さん

猫背をのばし

あなたは叫んでいいのだ

問三 — 線③「なぜだろう」とあるが、何に対して疑問を感じているのか。

適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 明石の鯛を食べることがなかなかできないこと。
- イ すりきれた靴でももつたいたなくて捨てられないこと。
- ウ 自分の思いをおさえこむのが普通だと思ふこと。
- エ 伊勢の海をまだ一度も見ることができていないこと。

問四 — 線④「萎縮する」と対になるものとして適切なものを次の中から

二つ選び、記号で答えなさい。

- ア 鯛を食べる イ 強く願う ウ ウィンクする
- エ 海を見る オ 叫ぶ

問五 — 線⑤「家々のひさは上目づかいのまぶた」の説明として適切な

ものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 将来に対する希望を持っていることを「上目づかい」と比喻で表現している。
- イ ひさしがめくれあがつて上向きになっているのを体言止めで表現している。
- ウ ひさしを見るためには上を見なければならぬことを間接的に表現している。
- エ 周囲の反応を必要以上に気にする人々の様子を擬人法によって表現している。

⑥ 今年もついに土用の鰻に会わなかったと

おーい 小さな釣道具屋さん

あなたは叫んでもいいのだ

俺はまだ伊勢の海も見えないと

(土橋治重編『日本の愛の詩』より引用)

※ 萎縮……ちぢんで小さくなること、元気がなくなること。

問一 — 線①「もっと強く願っていい」こととしてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 明石の鯛を食べること。
- イ 明るい台所があること。
- ウ 旅に出た人を送ること。
- エ 土用の鰻を食べること。

問二 — 線②「キユツと鳴る新しい靴の感触を／もっとしばしば味わいたい」とあるが、靴をどのようにしている状態だからこのような気持ちになるのか。二十五字以内で説明しなさい。

問六 — 線⑥「今年もついに土用の鰻に会わなかった」について説明した

次の文の空らんには当てはまる語を指定された字数で答えなさい。

「今年もついに」という言葉から、少なくとも **1(二字)** 年は「土用の鰻に会わなかった」ことが分かる。また、「会わなかった」というのは文字どおりの意味ではなく、鰻を **2(六字)** という意味である。以上のことから、小さな時計屋さんが少なくとも **1(二字)** 年間は **3(六字)** と思っていたことが分かる。

四

次の各問いに答えなさい。

問一 次の（ ）に入る適当な「漢字一字」を、後の「意味」を読んで答えなさい。

目を（ ）のようにする。

(意味) ものを探し求める時などに目を見開く。

問二 次の各文の中から、線部の言葉のつかい方が適切でないものを選び、記号で答えなさい。

ア たき火の火がめらめらともえ上がった。

イ わたのような雲がふかふかとうかんでいる。

ウ 私のおばは、ものごとをすげすげと言う人だ。

エ 試合に負けてしまい、すげすげと退場した。

問三 次の中から、日本語として適切でないものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア わざわざお越しくださり、ありがとうございます。

イ ぼくの母の仕事を、友達はみな知っています。

ウ 母はもうすぐ戻られますので、少しお待ちください。

エ 教室の後かたづけは、私たちがいたします。

問四 次の「慣用句」をつかって、短い文を作りなさい。

※慣用句の内容が具体的にわかるようにしなさい。

慣用句の例「足がぼうになる」

(悪い例)「ぼくは、足がぼうになった。」

(良い例)「ぼくは、落とし物をしてしまい、足がぼうになるまで

探し回った。」

※「動きを表す語」など、後に続く語によって形が変わる場合は、変えても良いです。

(例:「あるく」↓「あるいた」)

「目がない」

五

線部の平仮名を漢字に直しなさい。

1 台風になえる

2 その場のこうけいを目にやきつける

3 自転車がこしようした

4 念んをとなえる

5 一人ひとりの意見をそんちようする

